Voice 9

ぼいす

アキノ　タキノカハ

ワウジ　デンシャニ　ノッテ
モミヂノ　メイショノ　タキノカハヘ　マキリマセウ
アラアラ　イマデハ　オウチバカリガ　ナランデル

2002. 9. 15
北区飛鳥山博物館だより

ぼいす

学芸員のたまごたち

学芸員　鈴木直人

北区飛鳥山博物館では、今年度から博物館実習生を迎入れました。それまでは、展示や講座など館活動を軌道に乗せるためで精一杯だったため、実習生の受入れを先延ばしにしていました。しかし、本館も５年目を迎え、ようやく実習生受入れができるようになりました。学芸員の資格を取るためには二通りの方法があります。一つは文部科学省の資格認定試験を受けることです。もう一つは大学で資格取得のための単位を取ることです。後者の場合、必要単位を取得すれば卒業と同時に学芸員資格を得られます。博物館実習は大学で資格取得するための必修科目なのです。

さて、初めての博物館実習ですが、今年は御茶ノ水女子大学・埼玉大学・大東文化大学・明治大学の４校から１名ずつ、４名の女子学生が実習生としてやってきました。期間は７月30日から８月４日までの６日間です。普段は学生でも、この期間は博物館の準職員として勤務するよう心がけてもらいました。本館では毎年夏休みの期間は「夏休みわくわくミュージアム」と称して、親子で楽しめる催し物を数多く行っています。実習生には、主にこの催し物に、スタッフとして参加してもらいました。毎年恒例の「クイズラリー」ではなんとタヌキに変身。「夏休み土器づくり教室」では、土器づくりに四苦八苦する子どもたちにアドバイスをしてもらいました。

みんなタヌキに変身（クイズラリーより）

「みんな上手だね」ほめることも大切です（土器作り教室より）

当然、そのためには自分で土器が作れなくてはなりません。前日には猛特訓です。その他にも、大人向け館外事業の「12ヶ月巡り」の帯同や、寄贈資料の基礎整理作業など、多岐にわたって仕事をしてもらいました。実習生は何から何まで初めての体験で、緊張の連続だったようです。

大学では理論を学びますが、なかなか実践ではそれが上手く結びつきません。実習生もそのギャップに戸惑ったようです。催し物の多さや多岐にわたる内容。調査・研究とのバランス等、大学や本で学ぶ学芸員の理想像とは、とうていかけ離れた姿に見えたことと思います（変装までするのは本館だけでしょう）。しかし、これが現実であること、あるいは本館の目指すものを、実習を通じて感じ取ってもらう。実習にはそんなねらいがあります。“学芸員のたまご”が殻を破り、他館で学芸員となる日が来たとき、あるいはなれなくとも社会人となってまた館を訪れたとき、この経験を思い出してほしいものです。

秋期企画展「七社神社前遺跡の‘諸磯’集落」

観覧無料

10月12日(土)～12月1日(日)

西ヶ原二・三丁目一帯に広がる七社神社前遺跡では、「諸磯式土器」と呼ばれる土器を使っていた頃（縄文時代前期・約5500年前）の集落が確認されています。集落は大きな環状となるようで、その中央に墓域があるのが特徴です。「土壙」という素掘りの墓の中からは、遺体と共に副葬された華麗な土器や耳飾りが出土しています。今回はこの七社神社前遺跡の‘諸磯’集落について紹介する展示です。ぜひご覧になって下さい。（直）

土壙から出土した浅鉢形土器

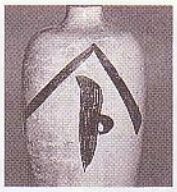
収蔵品のご紹介　「貧乏徳利」

この形、どこかで見たことはないですか？そうです、時代劇でよく見かけるあの徳利です。晩酌用の徳利ではなく、酒を買って持ち帰る時に使うものです。通称「貧乏徳利」と呼ばれていますが、どうして「貧乏」と付くようになったのか定かなところはわかりません。美濃焼や丹波焼の陶器や有田焼等の磁器のものがあり、大きさも五合から三升以上入るものまで何種類かありました。

なぜ、この徳利が必要だったのかといえば、酒の小売方法と関係があります。現在のような一升ビンでの小売方法になる以前、酒の小売りは樽からの量り売りでした。この時、持ち帰り容器として酒屋が貸し出していたのが「貧乏徳利」だったのです。ですから「貧乏徳利」は「貸し徳利」「通い徳利」とも呼ばれました。

しかし、写真の徳利は江戸時代のものではなく、明治時代以降の陶製品です。実は、一升ビンでの小売が主流になるのは、昭和時代に入ってからで、昭和初期頃まで「貧乏徳利」での量り売りは続いていたのです。通常、「貧乏徳利」には屋号、店名などを入れますが、この徳利にも店名と合わせて稲付、岩淵などの地区名や屋号が入っています。こうすると、お客は徳利を貸し出した店に再び買いに来ますし、店の宣伝にもなります。使われなくなるまでに、一体、この徳利は店と家庭の間を何度往復したのでしょうか。自分の家だったら月何回位なんて、つい思ってしまいませんか？ともあれ、量り売りのためのこの徳利、空きビンにはなりませんから、「貧乏」どころか、結構、環境にやさしい道具なのかも知れません。（R．Y）

地域名の入った徳利



岩淵名の徳利に書かれた屋号と店名

あるみるき

竹はスズメのあの世のおやど!?

突然ですが、みなさんは谷中七福神の一つ「福禄寿」が祀られているお寺をご存じですか？では、

秋のやわらかな日差しの中に佇む供養碑

親しみを込めて「赤紙仁王」と呼ばれている二体の石造金剛力士像が立つお寺といえばお気づきでしょうか。正解は、慶長初年に移りきたと伝えられている田端二丁目の東覚寺。今回は、秋の日ざしに誘われて訪れたこのお寺に建つ「雀供養之碑」を読み解いてみましょう。

当寺本堂に向かって右側に建つ「犬猫供養塔」の脇に、静かに佇むその句碑には「文化十四年八月長坂氏建之」「むら春〻め　さハくち声も　も〻こ恵も　つる能者やし乃　鶴農飛とこ恵」という文字が彫り込まれています。多少の劣化はみられるものの、よく見れば読みとれる文字も多く、ことに年号は肉眼でも十分な程です。この狂歌が詠まれた年代等の詳細は不明ですが、詠人は有名な大田南畝。彼は幕臣でありながら文人として名をなした人物です。文化十年には金輪寺に足を運んだりもしています。

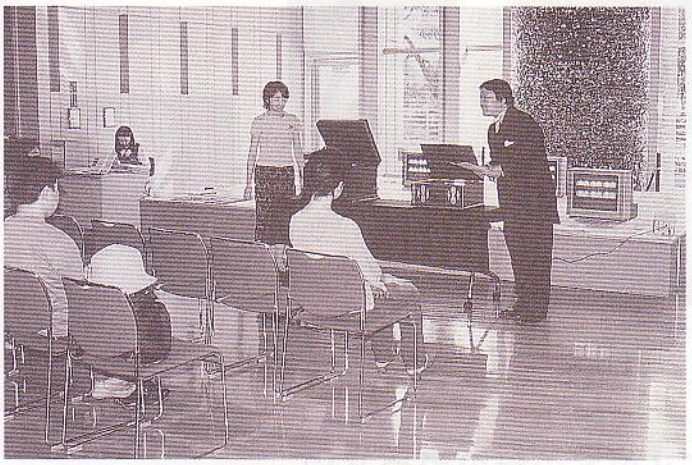
次に碑全体を見てみましょう。ここで供養されている雀は古来より人間と身近な存在であり、諺や昔話にも多く登場します。句碑は円筒状でしかも所々に横断する溝が三本…。どうやら竹にみたてているようです。なるほど、雀の供養に最もふさわしく思える形状です。ここなら彼らもさぞかし安らかな眠りについた事でしょう。

古人から現代人への“謎解き挑戦状”とも思える歌碑・句碑を読み解く小さな旅…。皆さんも是非いかがですか？（中村）

EVENT REPORT イベントレポート

企画展「野口雨情・山本鼎生誕120年　金の船・金の星　今に生きる大正児童文化の世界」の開催と体験型事業について

当館では７月20日から９月23日を会期として、「野口雨情・山本鼎生誕120年　金の船・金の星　今に生きる大正児童文化の世界」展を開催しました。この展示は大正時代、北区田端にあった金の船社（のちに金の星社）で発行した児童雑誌を中心に、山本鼎の自由画啓発活動、野口雨情に代表される童謡運動の動向をたどるもので、展示では全体を「ヨム・エガク・ウタフ・カク・ヲドル」の５コーナーを約150点の資料で構成し、大正児童雑誌文化の多面的な活動を紹介しました。

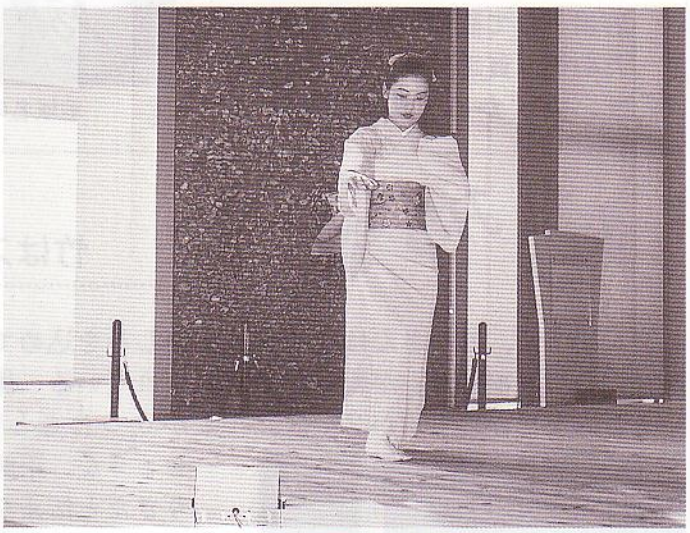


蓄音機の調べを楽しむ

また企画展示とともに特別展示室入口ホワイエ空間に特設舞台を作り、会期中８回の「蓄音機コンサート」の実施や、『金の船』に掲載された大正時代の「鏡の国のアリス」などの「聴き語りの夕べ」を計３回開催しました。これらのワークショップでは、今日大きく変容する学校文化・子ども文化のなかで、大正時代の子ども文化との連続面と不連続面を浮き彫りにすることを意識した事業をもくろみました。

さらに７月28日には、野口雨情の童謡運動に共鳴した林きむ子の童謡舞踊を紹介する「童謡舞踊のつどい」を上演しました。日本舞踊林流二世家元・林一枝さん、声楽家・川田正子さんのご指導のもとに子どもたちの踊りが繰り広げられ、参加者は２１世紀の現在に生きる大正児童文化の一端を体感する機会となりました。

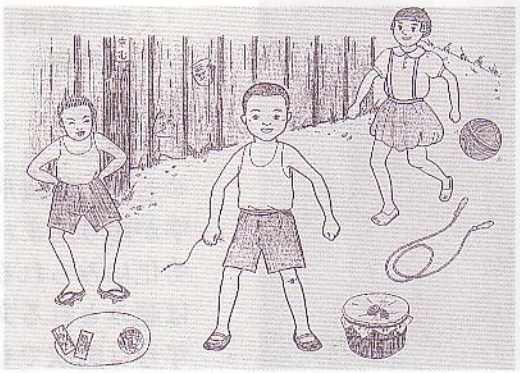
このほかの普及事業としては２回の企画展講演会を開催しました。７月26日は、白百合女子大・宮崎芳彦教授による「田端発信　児童文化」、８月４日は、武蔵野女子大・野口存弥教授「いま、大正童謡運動を考える」をテーマに、大正児童文化の歴史的背景について企画展を補強する貴重なお話を頂くことができました。（Ｉ）



あでやかな童謡舞踊の姿

今年も『夏休みわくわくミュージアム2002 ～コドモと、むかしコドモだった人たちへ～』を開催！

今年の夏もアノ『わくわくミュージアム』を開催！子どもを中心に、多くの方に楽しんでいただきました。例えば、カンポックリやゴム段など、むかしの遊びをみんなでやってみる『ＧＯＧＯ博物館』では、お父さんやお母さんも大活躍！すっかりコドモに戻っていました。また、期間中いつでも楽しめる『なにしてあそぼ?!』のコーナーでは、「むかしの遊びカード」や「お友だちカード」を集めて、みなさん思い思いのオリジナルシート作りに夢中になっていました。(ゆ)



集切貼塗
オリジナルシートの完成!!

写真に見るあの日あの時

商店街でおかいもの♪

昭和30年代半ばの東十条商店街（倉田正義氏提供）

東十条駅北口から、神谷一丁目方面に伸びる東十条商店街。この写真は、駅を背にして現・東十条交番前の交差点付近を撮影したものです。商店街には七夕飾りがなされているので、おそらく、７月７日前後に撮影されたのでしょう。

現在の様子と比べてみましょう。建物は変わりましたが、向かって左手、電柱わきに看板の見える「菅沼不動産」は変わらず営業中。その手前、交差点カドの「小林道具店」は、現在不動産屋さんとなっていますが、建物自体は当時のままのようです。商店街入口のアーチに掲げられた東十条商店街のマークは、すでに昭和30年代には使用されていたことがわかります。

現在の東十条商店街（H14.6 撮影）

買い物中のご婦人たちに目をやると、エプロンにゲタ履きというのが定番スタイルだったようです。いかにも、お勝手口からちょっと買い物に出てきた、という風情ですね！今ではほとんど見かけない“和服に割烹着姿”の方もいます。のどかな初夏の日の買い物風景です。（ゆ）

お客様の声

アンケートによせられたお客様の“ぼいす”をご紹介します。

「第５回夏休み土器づくり教室　親子土器づくりコース」より

○子どもの大好きな分野で大はりきりで頑張っていました。朝目がさめたときから「ああ、やっと待ちに待った日が来た！」なんて....。そんなに楽しみだったのかと思いました。

（区内30代女性）

◇思い通りの縄文土器ができたかな？（編）

「スポット展示ＡＳＵＫＡＹＡＭＡセレクション５」より

○学芸員というと扉の向こうの存在だが、親近感がわくし、地域博物館として良い取り組みだと思う。

（板橋区20代男性）

◇この企画は数多くの収蔵資料から、学芸員が選りすぐった５つの資料を展示したものです。第２弾、第３弾と続けていきたいと思っています。（編）

「企画展金の船・金の星」より

○童謡で育った世代ですので幼い頃の生活のあれやこれやを懐かしく思い出しました。学芸会、学校の行き帰りの風景、子守りや水汲みなどの手伝い....。全てが童謡と同居していた時代でした。おだやかで心が豊かになった時間がすごせました。はるばる来た甲斐がありました。ありがとうございました。

（品川区60代女性）

◇お客様にとって癒しのひと時となったこと、嬉しく思います。ありがとうございました。（編）

人物往来

今年の３月31日をもちまして和田哲郎館長が“ご卒業”、伊藤真誇事業担当主査が異動いたしました。その後任として４月１日より川嶋智尚生涯学習推進課長が館長兼務となり、千葉誠主査が事業担当主査として着任いたしました。よろしくお願いします。

博物館からのお願い　古い写真探しています

みなさんのお宅に古い写真はありませんか？昭和50年代から明治・大正期までの北区の町の様子が写っている写真、人々のくらしがうかがえるような写真を探しています。あなたが撮った写真の中に、昔の北区の貴重な一コマが残されているかも知れません。写真は一時お預かりさせていただいて、複写させていただければと思います。ぜひ、ご協力お待ちしております。

ご連絡は03-3916-1133

北区飛鳥山博物館　クボノまで

今はなき娯楽の殿堂の姿
（手川文夫氏提供）

学芸員リレーエッセイ

博物館いろは歌留多

いい企画！ 蓋を開けても いい企画？

真面目一方というイメージの博物館ですが、最近は各館が工夫を凝らし、多彩な催しや展示が行われるようになってきました。学芸員は自らの調査研究の蓄積や隠し持った芸（？）をもとに、魅力ある企画を作ろうと日夜固くなった頭を絞っています。しかし実際のところ、お客様の反応ばかりは蓋を開けてみなければわかりません。

例えば、「北区・12ヶ月めぐり」という１年間継続して区内を見学する催しがあります。当初は地味な講座なので応募者も少ないものと思っていましたが、募集した途端に大変な反響！ どうやら、こちらがネックと思っていた１年間という設定がかえって歓迎されたようです。急遽定員を増やし、団体ツアーなみの規模になってしまいましたが、これは嬉しい誤算でした。

もちろん「自信作」なのに反響はイマイチということも。当館の夏の名物イベント「クイズ・ラリー」も、はじめは試行錯誤でした。スタッフの扮装が見事過ぎて（？）子供に怖がられたり、夏休み後半に実施したら宿題の追い込み時期に重なってしまい、わずか数人の参加だったり…。担当者の意欲が空回りし、思惑がはずれることもしばしばですが、そんな時は思わず一人つぶやきたくなります…いい企画だと思ったのに…。（K）

平成14年度下半期の主な催し物

10月	◎秋期企画展「七社神社前遺跡の‘諸磯’集落」（12日～12月１日） ◇講座「赤羽台団地を歩く」（５日）
11月	◇第４回初級考古学講座「考古学をはじめよう」（９日・16日・23日）
12月	◇学校対応事業「昔の道具展」（15日～２月23日） ◇考古学講座番外編その２「新聞から読む考古学2002下半期」（23日）
平成15年１月	◇講座「江戸名所図会を読む」（10日・17日・24日）
２月	◇講座「幕末の王子」（７日・14日・21日・28日） ◇第６回遺跡探訪（８日・９日）
３月	◎展示「奥山峰石と仲間たち展」（１日～30日） ◇講座「地域学講座」（27日）

催し物名は全て仮称です。
この他にも各種催し物を予定しています。詳しくは館発行「催し物案内」をごらんください。
★**11月３日文化の日**は常設展示を**無料**でご覧になれます。

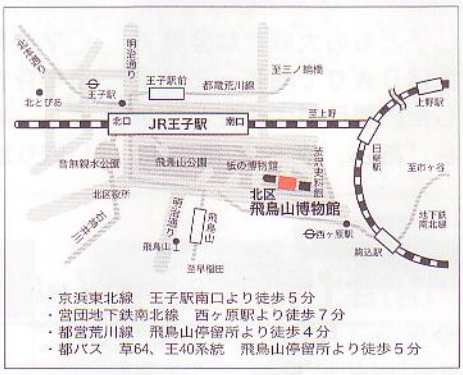
利用のご案内

【開館時間】
午前10時00分～午後５時
（有料の展示室への入場は午後４時30分まで）
【休館日】
毎週月曜日（国民の祝日・振替休日の場合は開館）
年末年始（12月28日～１月４日）
国民の休日および振替休日の翌日（土曜・日曜日の場合は開館）
このほかに臨時休館日があります。

【常設展観覧料】

	個　人	団　体
一　　般	300円	240円
小・中・高	100円	80円

・小学生未満は無料
・団体扱いは20名以上
・三館共通券（一般720円小中高320円）は当館と、渋沢史料館、紙の博物館の３館をごらんになれます。



編集後記

このところ季節が早まっているように感じられますが、ぽいすvol.９が発行される９月15日は、まだ残暑が厳しいのでしょうか？それとも秋の気配が？編集中は夏真っ盛りなので、何かぴんとこないものです。それでも、表紙は秋らしくと思い、紅葉で有名な滝野川の渓谷と石神井川をイメージしてみました。さて、ぽいすも次号でvol.10となります。記念として何か特集を組みたいと思っております。こう、ご期待。（直）

北区飛鳥山博物館だより
ぽいす　Vol.９
発行　平成14年９月15日
編集　北区飛鳥山博物館
〒114-0002 東京都北区王子1-1-3
TEL. 03-3916-1133
発行　東京都北区教育委員会
〒114-0022 東京都北区王子本町1-2-1
TEL. 03-3908-1111（代）
印刷　文明堂印刷（株）
刊行物登録番号　14-2-010